HRW2010

第6回ヘルスリサーチワークショップ

オープン参加者公募

本年1月に第５回を開催し、関係各方面から高い評価を頂いているヘルスリサーチワークショップ（詳細は当財団機関誌「ヘルスリサーチニュース vol 53（2009年４月号）」をご覧下さいー当財団ホームページからご覧になれます）の第６回を、以下の要領で開催致します。
約40名の参加者は、第５回参加者からの招待枠、新規推薦枠、及びオープン参加枠（公募）で構成されますが、今回、下記のとおりオープン参加者（公募による参加者）を公募致します。
新たな**「“出会い”と“学び”」**の２日間にご期待下さい。

第6回ヘルスリサーチワークショップ

テ ー マ： プロフェッショナリズム再考
ー希望と成熟の社会を目指してー
開 催 日： 平成22年1月30日（土）・31日（日）
開催場所： アポロラーニングセンター
（ファイザー株式会社研修施設 東京都大田区）＜予定＞
参加者には追って詳細をご案内いたします
参 加 者： 約40名

公募要項

参加費無料

オープン参加枠： ６～７名程度
参加要件： 下記分野の将来性ある若手研究者または実務担当者（年齢は不問）。
共通言語は日本語（国籍は不問）。尚、動機書の提出と推薦者が必要です。

1．ヘルスリサーチ分野
経済学者、統計学者、経営学者、社会学者、心理学者、人類学者、哲学者、教育学者、法学者、倫理学者、医療疫学者、保健学者、医療マネジメント学者、医療情報学者、医療政策学者、医療システム学者、ゲノム医学者

2．保健医療分野
医師、歯科医師、看護師、保健師、薬剤師、ケアマネジャー、カウンセラー、理学療法師、栄養士他

3．行政分野
保健医療政策の立案担当者、保健医療政策の実施担当者

申込期間： 平成21年６月１日（月）～７月31日（金）＜当財団事務局必着＞
選出方法： 申込者多数の場合は、幹事・世話人会にて選出。
選出結果は平成21年９月下旬に本人に通知。
申込方法： 財団所定の申請書式（当財団ホームページから申込書をダウンロード）に必要事項をパソコン入力の上、当財団事務局へ、郵便でお送り頂くと同時に、E-mailにWordファイルを添付して当財団メールアドレスへお送り下さい。

財団法人ファイザーヘルスリサーチ振興財団

〒151-8589　東京都渋谷区代々木3-22-7新宿文化クイントビル
Tel:03-5309-6712　Fax:03-5309-9882
E-mail：hr.zaidan@pfizer.com
ＵＲＬ：**http://www.pfizer-zaidan.jp**

第6回ヘルスリサーチワークショップ
プロフェッショナリズム再考

― 希望と成熟の社会を目指して ―

趣意書

「地獄への道は善意で敷き詰められている」という言葉がある。「どれほど悪い結果になったことでも、それが始められたそもそもの動機は善意によるもの」という意味である。

リスクが高い医療行為の末、ときとして不幸な結果に陥ることがある。医療の不確実性が理解されないまま、法治国家における社会的正義の名の下に医師が逮捕、勾留される。その行き着く先はリスク回避・過剰検査・萎縮治療からなる防衛医療であり、産科医療の危機や救急車のたらい回しにつながっていく。

平成16年、プライマリ・ケア診療能力を持ち全人的医療を行う医師を育成する目的で、すべての研修医にスーパーローテート研修を義務づけた新医師臨床研修制度が開始された。だがその結果、大学病院から一般病院へと研修医が流れ、大学病院がマンパワー不足となった。地方の中小病院にいた働き盛りの中堅クラスの医師が大学病院に引き戻され、地方は前代未聞の医師不足に陥った。

患者中心の医療を目指しサービス性を高めようと「患者様」という呼称が使われるようになってから約10年が経ち、患者の権利意識は高まった。しかしその一方で、権利意識が極端に肥大したクレーマー的な患者の問題行動に苦しんでいる医療者は少なくない。

上記の3つの事例はそれぞれ、医療事故を防ぐため、全人的医療の実践のため、患者サービス向上のために善意で始められた。これらはいずれも、課題点を探り出し、それに対する対策を講じた結果である。スタート時点において間違いではなかった方法だが、結果的に問題をさらに複雑化させてしまった。同様の発想、すなわち、不具合の原因を探り出し、問題点を見つけて対処する、従来の「問題解決型手法」で対応していくことが、果たして今後の医療を改善させるのだろうか?

医療者は人命に携わる職種であり、患者からの感謝や地域社会からの尊敬がモチベーションになることは、今も昔も変わらない。しかし最近、医療者の士気は低下し、自らのプロフェッショナリズムも根底から崩れつつある。この状況は、医療制度等システムの問題と同等か、それ以上に危機的であると言っても過言ではない。

患者は、優れた人格と卓越したスキルを持つ医師を求めるが、それは青い鳥を探すようなもので、理想通りの医師はなかなかみつからない。同様に、医療者からみて完璧な患者という存在も、多分いない。ただし、確実に存在するのが「よい患者-医療者関係」である。

ところが、その関係性は崩壊の一途を辿っている。それぞれが自分たちの立場を主張し、自己の利益を守ろうとして疑心暗鬼になる「負のスパイラル」に陥っている。医療者側と患者側の間には、不信感という大きな溝が

幹事

世話人

敬称略・五十音順

秋山　美紀　　都竹　茂樹　　中村　伸一　　安川　文朗

既にできあがってしまった。

この状況は、医療者のプロフェッショナリズムにどう影響しているのだろうか?

医療者にとってのプロフェッショナリズムは、もともと「在る」ものが維持困難になっているだけなのだろうか? そもそも、どのようにして形成されていくのだろうか? その職種を志して入学した学校で、教育のカリキュラムを通じて原型ができていくのか? 免許を取得後に職能集団の中で、伝統的に先輩から後輩へと受け継がれていくのか? 医療現場で働くうちに、多くの患者や地域社会との関わりの中で育まれていくものなのか?

また、プロフェッショナリズムは、自然に形成されていくのを期待するだけでよいのだろうか? 教育者が、研究者が、職能集団が、患者が、地域社会が、あるいは国家が、意図的に医療者のプロフェッショナリズムを作り上げることは可能なのだろうか?

「今の日本には何でもある。ただ『希望』だけがない」…平成10年、村上龍が「希望の国のエクソダス」で暗示した近未来は経済破綻だったが、あれから10年以上経った今、医療には「崩壊」という二文字がまとわりついている。

今、医療の閉塞的状況に対する処方箋は、案外「希望」なのかもしれない。細かい問題点の繕いでは済まなくなってきた混沌とした状況で、それを打破するのは「希望追求型手法」ではないだろうか。希望は、叶えられない夢としてあるのではなく、社会を変えていく目的にも手段にもなりうる可能性を秘めている。

医療者・非医療者にかかわらず、個人の医療に対する希望は、どのようにつくられ、また失っていくのか? 医療を含む社会状況が、どのように個人の医療への希望に影響しているのだろうか? 逆に、個人の希望は、社会にどのような影響を与えているのだろうか? また、個人の希望が、社会を変えていけるのだろうか?

第二次世界大戦後から日本を立て直してきた今の高齢者たちが、あの破滅的状況の中でも、希望を見いだし決してあきらめなかったからこそ、今日の日本がある。私たちは、現在の医療を取り巻く状況の中で、どのような希望を見いだし、社会を変え、未来の日本人にバトンを渡すことができるのだろうか。

今一度、医を行うことの原点に立ち戻り、プロフェッショナリズムとは何かを再考し、希望にあふれる成熟した社会の実現に向けて、我々が目指すべき未来のビジョンを考察していきたい。

第6回ヘルスリサーチワークショップ幹事・世話人一同

大久保　菜穂子

小川　寿美子

後藤　励

當山　紀子

松森　浩士

幹事・世話人からのメッセージ

幹　事　秋山　美紀

慶應義塾大学総合政策学部　専任講師

Professionalって何だろう・・・？　似ていることばに専門家 (Expert) がある。どちらも、際だった専門知識や専門的技術を持ち、多くがそれを生業にしているという共通点があるようだ。では違いは何だろう？かつては神に仕える職が Profession だったという。おそらく Professional には「社会に奉仕する」という要素があり、それが単なる「専門家」と「プロフェッショナル」を分ける境目なのではないだろうか・・・？
ところで、Profession から派生した別の言葉に Professor がある。大学で教鞭を取るという職についた我が身を省み、襟を正して皆さんとの議論にのぞみたい。楽しみにしています！

幹　事　都竹　茂樹

高知大学医学部（公衆衛生学）　准教授

今回のテーマが「プロフェッショナリズム再考」に決まって、プロフェッショナリズムが私にとって羅針盤や拠り所であったか？と改めて問うてみた。確かに、神に従い、仕える聖職者、法律家、医師がプロフェッショナルとされてきたことは、「知識」としては理解していたが、現実は結構「想い」だけで突き進んできたように思う。
こんな私ではあるが、今回のワークショップでは皆さんと「プロフェッショナリズム」、そして「希望、成熟」について熱く！！語り合えることを楽しみにしています。よろしくお願いします。

幹　事　中村　伸一

おおい町国保名田庄診療所　所長

NHK「プロフェッショナル仕事の流儀」に出演した際、司会者から「プロフェッショナルとは？」と問われ、「逃れられない困難な状況にあっても、それを宿命として受け入れる。なおかつ、時として、それをプラス思考にして楽しむことができるのがプロフェッショナル」と答えた。ただし、問われたから答えただけであって、常にそのようなことを考えているわけではない。しかも、私だけの勝手な思い込みである。
だからこそ、今一度、多くの方々とプロフェッショナリズムについて語り合ってみたい。自分達自身に希望を見いだし、社会に希望を取り戻すために。

幹　事　安川　文朗

熊本大学法学部公共社会政策論講座　教授

プロフェッショナルとアマチュアの境界線は、いつの時代もそれほど明確ではなかった。プロと呼ばれる基準が「資格」や「報酬」であるとしても、それは単に形式的な区別にすぎない。アマチュアとプロを隔てる本質的な境は何だろうか。行動力、精神力、洞察力、忍耐力、そして想像力がプロの源泉だとすれば、それをどう培い、またその価値はどう評価されるべきだろうか。このワークショップで、そうした泥臭いけれど本質的な“議論”が展開できれば、すばらしいと思う。

世話人　大久保菜穂子

日本伝統医療科学大学院大学統合医療研究科　准教授

今回のキーワードは「プロフェッショナリズム」。医療者の士気やモチベーションの低下が叫ばれている昨今、どうすれば士気が上がり、プロフェッショナリズムが構築できるのでしょうか。必要なのは夢や希望でしょうか。それとも他との「かかわり」でしょうか。「よい患者 - 医療者関係」に向け、医療者側と患者側の間に、信頼関係を築くこと。お互い成熟することでよい関係性が育まれるならば、教育の視点からどうやってプロフェッショナリズムを育てるのか議論したいと思います。みなさんとの出会いと学びによる実り多き 2 日間を心から楽しみにしております。

世話人　小川　寿美子

名桜大学人間健康学部　准教授

過去 5 回の HRW はすべて「現代医療」の行き詰まりを意識したテーマであり、参加者も保健・医療・福祉関係者が多数を占めた。しかし今回のテーマは“プロフェッショナル”と大胆な切り口。標準化・マニュアル化を珍重する現代医療界では「使命感」や「謙虚な努力」といったプロフェッショナル精神をもつ人材は、案外、少数派かもしれない。敢えて異分野で極めた達人と意見を交わすことで、“現代医療”に関する意表を突いた意見がでてくることを願いつつ、芸能、美術、スポーツなどの分野における“プロフェッショナル”な方々の思い切ったご参加を期待したい。

世話人　後藤　励

甲南大学経済学部　准教授

医学部に入学してから 17 年経ちました。主に医学をやっていた期間が 8 年、主に経済学をやっていた期間が 9 年、とうとう経済学の占める割合が半分を越えました。はじめは経済学のことを、よりよい医療を実現するためのツールの一つ、くらいに考えていたのですが、この頃では経済学偏重になりがちです。一方、患者さんに「専門は何ですか？」と聞かれると、「内科全般ですね・・・」、といくぶん伏し目がちに答えます。
なんだか中途半端な私ですが、今年も様々な立場から医療を見てらっしゃる方々とあつく語り合いたいと思っています。

世話人　當山　紀子

東京大学大学院医学系研究科　博士課程

様々な保健医療分野の課題を考える時、その分野だけでは解決できない大きな壁に突き当たる。社会資源は限られており、個人の自由を最大限尊重しつつ、あらゆるニーズを満たすことは難しい。
限られた資源の中で、何かを選ばなければならないとしたら、私たちは何を選ぶのでしょうか？その答えは私たち一人一人の手にゆだねられていると思う。今の世界に、「正解」はないのかもしれない。一生懸命考え、行動することでしか、解決の糸口は見えないのではないでしょうか。今回は、プロフェッショナリズムを切り口に、皆さんと語り合えることを楽しみにしています。

世話人　松森　浩士

ファイザー株式会社執行役員

日本におけるプロフェッショナリズムは欧米とはかなり異なると思われる。日本文化由来の職人的な美意識がそれを支え、時に自己・家族犠牲をともなう。このような日本的プロ意識に富んだ社会そのものが、技術大国日本を造り上げてきたと言える。それが今崩れ始めているのかもしれない。医療においてはこれはかなり深刻な問題と言える。どうしたらそれを取り戻せるのか。日本の良さとプロフェッショナリズムについてこの機会にじっくり考えててみたい。

（敬称略、五十音順）